弘前大学教育学部紀要　第125号：29～40（2021年３月）
Bull. Fac. Educ. Hirosaki Univ. 125：29～40（Mar. 2021）

戦後開拓地における学校と地域社会（３）
―学校を通じた「ふるさと」の創造―

School and community in Postwar Reclamation (3)
A case study on the process of building Furusato by the elementary and junior high school

高　瀬　雅　弘*
Masahiro TAKASE*

要　旨

本稿は、1940年代後半の緊急開拓事業期に成立したひとつの戦後開拓地と、そこに立地した小中学校での教育・被教育経験に基づき、地域社会と人びとにとって学校がいかなる存在意義を有していたのかについて考察するものである。具体的には、戦後開拓地において、①人びとは学校と地域社会にどのように出会い、どう関わっていったのか、②地域社会の形成において学校はいかなる役割を果たしたのか、③学校は「外」の社会と地域社会とをどのようにつないでいたのか、④教育・被教育経験を媒介として形成された「ふるさと」というものが、いかにして継承されようとしたのか、を問うことで、戦後開拓地における学校の存在意義の一端を明らかにする。

キーワード：戦後開拓　　へき地教育　　教育経験　　オーラル・ヒストリー　　記憶の継承

１．はじめに

（１）問題の所在

青森県西津軽郡深浦町の中心部から、吾妻川に沿って山道をしばらく上ったところにひとつの集落がある。1947（昭和22）年より入植が開始された戦後開拓地、長慶平である。集落の中心には、鉄筋コンクリート２階建ての建物がある。2002（平成14）年３月まで、深浦町立長慶平小中学校の校舎として使用されていたものであり、1948（昭和23）年２月の開校から、子どもの教育機関としてはもちろんのこと、地域の人びとにとっての最も重要なコミュニケーションの場であったものである。

町や既存の集落から離れたところに立地した戦後開拓地では、様々なインフラの不足が問題となるなかで、子どもたちの教育機会の確保も大きな課題となった。1946（昭和21）年度には開拓地における学校分校整備のための補助制度が設けられ、へき地教育振興法と合わせて学校の整備が進められた。

本稿の課題のひとつは、戦後開拓地の人びとにとっての学校の存在意義を明らかにすることである。上記のような開拓地の課題に即して、学校はいかにして求められ、どのように形作られ、そしていかなる場として認識されるようになったのか。とりわけ初期段階では既成の地域社会を基盤とするのではなく、地域社会と学校とが同時並行的に形成されることが多かった、戦後開拓地に固有の学校の意味を検討することが第一の課題である。

もうひとつの課題は、戦後開拓地の学校が人びとにどのように生きられたのかを問うことである。「戦後」「地方」「へき地」「引き揚げ」「入植」といった時代や場所の制約や条件のもとで、開拓地の人びとが学校をどのように経験したのか。教育と被教育をめぐる経験を通して、その位相を明らかにする。

本稿の対象となるのは、聞き取り調査の対象者の教育・被教育経験をふまえた1950年代半ばから1980年代前半までの約30年間である。この間には高度経済成長期や開拓農政の終焉といった社会変動を経験している。これらと連動した地域社会の変容のなかで、学校が生み出したもの、もたらしたものの意味を捉えたい。

＊弘前大学教育学部社会科教育講座
Department of Social Studies Education, Faculty of Education, Hirosaki University

（2）先行研究の知見

戦後開拓地における学校と地域社会をめぐる研究は、以下のようなカテゴリーにおいて蓄積されてきた。

第一に、1950年代の教育社会学における同時代的な関心に基づいた分析がある[1]。農村社会学の知見などに依拠しながら、へき地教育との関わりで戦後開拓地の特性に注目した研究が蓄積された。

第二に、上の研究とも関わりを持ちつつ、教育学分野におけるへき地教育研究の文脈において、事例研究が行われてきた。1953（昭和28）年２月より刊行された『僻地教育研究』（現『へき地教育研究』）においても、北海道を中心として戦後開拓地の特性や問題状況を捉えた研究[2]が見られる。

これらの研究はそれぞれ重要な知見を提供しているものの、いくつかの限界を抱えている。ひとつは、同時代的な問題意識に基づく研究は、その後の展開や変容を視点として持ち得ないことである。もうひとつは、これと関連して、学校と地域社会との関係性から見たそこでの経験の意味づけを問うものとはなっていないことである。

こうした問題意識に基づき、青森県西津軽郡鰺ヶ沢町山田野開拓地をフィールドとした高瀬の研究[3]は、戦後開拓地における学校と地域社会の関係性とそこでの教育・被教育経験を問うことを指向したものである。しかしながら、対象としているのはひとつの開拓地の事例であり、多様性を持った戦後開拓地を広く捉えるまでには至っていない。それゆえに事例研究の蓄積による比較検討といったことが課題となる。

戦後開拓地における学校と地域社会の関係性への問いは、近年のより広い文脈における研究に対して、次のような接点を持ち得ると考えられる。

ひとつは、方法としてのオーラル・ヒストリーである。それは大門正克の研究[4]が提起するような、民衆の教育経験ないし被教育経験を、オーラル・ヒストリーを用いることで捉え返す、また対立や葛藤といった位相を「複雑な反復過程」[5]において捉えるというものである。

もうひとつは、視点としての「境界線の学校史」研究[6]である。この視点を提起する木村元は、学校の境界線によって枠づけられるものとして、「学校体系に内包された学校」と「学校が内部に有する境界線」の存在を指摘する[7]。この枠組みを参照するならば、戦後開拓地の学校もまた、「へき地」や「分校」といった境界線によって枠づけられたものとして捉えることができる。そしてこの境界線は、「一般農村」に対する「開拓地（農村）」という形で、地域社会に関しても引かれるものであったといえるだろう。そうして幾重にも引かれた境界線によってカテゴライズされた学校のありようを問うことで、戦後日本の学校のひとつの形をあぶり出すことができるのではないか。

（3）分析課題

以上のような研究状況をふまえ、本稿では以下のような分析課題を設定する。

第一の問いは、戦後開拓地において、人びとは学校と地域社会にどのように出会い、そしてどう関わっていったのかということである。成立しつつあった開拓地に入っていく際、教師や子どもたちはそこをどのような場として認識し、いかにして溶け込んでいったのか（およびその困難さというものがあったのかどうか）について考察する。

第二に、戦後開拓地における地域社会の形成において学校が果たした役割について考察する。この点については、他の戦後開拓地の事例に即して検討を試みているが[8]、開拓地が持つ多様性や特性というものをかんがみ、その具体的な位相を明らかにする。

第三に、学校が戦後開拓地とその「外」とをどのようにつないでいたのかについて検討する。具体的には、中学校という「外」とつながるルートのありようについて、そこに表れる子どもたちの地域観と進路・将来像を手がかりに考察を試みる。

第四に、学校での教育経験や被教育経験を媒介として形成される「ふるさと」というものについて、戦後開拓地ではどのような形で継承が試みられたのかについて検討する。ここでの「ふるさと」は、普遍性を持ったイメージとしてのそれではなく、具体性をともなったものである。ひとつの戦後開拓地を経験した人びとの継承の実践の意義を問うことがここでの課題である。

以上のような作業を通じて、戦後開拓地における学校の存在意義の一端を明らかにしたい。

２．対象と方法

（1）事例の概要

本稿の対象となる事例は、1947（昭和22）年10月より入植が開始された青森県西津軽郡深浦町の長慶平開拓地と、同地に1948（昭和23）年に設置された長慶平小中学校である（設立の経緯については後述）。

長慶平は、1945（昭和20）年11月に策定された「緊急開拓事業実施要項」に基づく緊急開拓の一環として開墾が行われた地域である。深浦町の中心部から約12㎞に位置する、標高300ｍほどの高原盆地だが、起伏が多く、平地はほとんどない。それまでは人の住んでいない、原生林に覆われた土地で、営林署関係者が伐採、造林、調査のために入る、または近くの住民が山菜採りに入る程度の場所であった。

戦後旧満州・樺太（サハリン）から青森県内に引き揚げてきた人びとは、親類・知人を頼りながら、新たな生活の場を求めていた。深浦町および岩崎村（2005（平成17）年に深浦町と合併）でも、引き揚げ者たちは1947（昭和22）年春から、開拓地の調査を開始した。青森県でも引き揚げ者への対応として、県開拓課が食糧増産のための入植を進めることとなった。そして深浦町葦沢（よしやち）地区と岩崎村仁瀬（にぜ）地区の国有林が「開拓適地」として認められた。

1947（昭和22）年７月、深浦町・岩崎村では開拓希望者を募るため、引き揚げ者や復員軍人の家庭への訪問が実施され、８月には深浦映画劇場を会場に開拓入植をテーマに引き揚げ者大会が開催された。そしてその場で元岩崎村長の堀内利弥氏を団長とする開拓団が結成され、開拓計画書（「長慶平電化開拓村事業計画構想」）が作成された。その冒頭の目的は、以下のように記されている。

> 外地引揚同胞更正のため国有林地内最適地を選定して密林を伐開し田畑放牧地を開拓入植す。地内の水力による発電動力を中核に包擁する農村工業を織り込みの合理的多角経営の山農村を創設し且つ地内荒廃中の温泉を開発して衛生慰安施設となし基督布教に依る最高度の道義文化を保有する理想郷を建設し以て新生日本の再建に寄与せんとす。[9]

この一文からは、単なる食糧増産にとどまらない指向性（電化開拓といった近代化[10]や道義文化[11]への意識）が見て取れる。それは開拓団の名称にも表れている。そもそも「長慶平」の地名は元からあったものではない。当初は「陸奥平原」開拓を名乗っていたものが、かつて長慶天皇が津軽紙漉沢へと歩を進めた際、深浦に上陸し、吾妻川を上って山越えをしたのではないか、という説に則り、堀内団長の意見によって「長慶平」開拓となった[12]。

入植は1947（昭和22）年10月の先遣隊によって開始された。深浦町と岩崎村からの入植者が23名、中津軽郡相馬村出身者が１名の24名が最初の入植者である。翌1948（昭和23）年２月から３月にかけて22名が入植、同年10月には山形県開拓組合の斡旋により入植が行われた。このときの一次隊17名、さらに翌1949（昭和24）年には二次隊10名の計27名が入植した。以後1950（昭和25）年から1953（昭和28）年にかけては地元や青森県の縁故者を中心として13名が入植し、長慶平は開拓集落としての形を整えていった。

「開拓適地」とされた長慶平ではあったが、地形は急傾斜地であり、畜力や機械の導入も難しく、開墾は困難であった。陸稲、雑穀、なたね、大・小豆等が作付けされたが、生育は悪く生活は厳しいものであった。そのため入植者の生活は1960年代半ばまでは原生林の伐採と炭焼きによってまかなわれた[13]。

（２）研究方法

『青森県戦後開拓史』『青森県教育史』『深浦町史』『岩崎村史』等の文献資料を参照したうえで、2018（平成30）年３月から2019（平成31）年８月までの間に、長慶平中学校の元教員３名と同小中学校卒業生１名を対象に、ライフヒストリーインタビューを実施した。

聞き取りの内容は、①基本属性（氏名、出生年、教員になったきっかけ、赴任・移住の経緯）、②長慶平地区の印象（赴任・移住したときの様子、保護者や子どもたちの姿、出稼ぎの影響）、③長慶平小中学校での教育・被教育経験（工夫や苦労、学校行事、保護者や地域の人びととの関わり）、④自身にとっての同校での教育・被教育経験の意味（その後の教育経歴やライフコースへの影響、人生を振り返ったときの意義）、の４項目である。

2020（令和２）年８月に深浦町教育委員会が所蔵する学校記念誌等の文献資料調査を実施した。聞き取りに基づくフィールドノートに加えて、これらの資料も適宜参照しながら分析を行う。

（３）対象者

ライフヒストリーインタビューの対象者は、長慶平中学校に教師として勤務した森山嘉蔵氏（1927（昭和２）年生まれ）、木村賢治氏（1932（昭和７）年生まれ）、山田邦照氏（1938（昭和13）年生まれ）と、同校卒業生の斎藤勝義氏（1941（昭和16）年生まれ）の４名である。

森山氏は、深浦町出身で、1950（昭和25）年に深浦町立深浦中学校の教諭としてキャリアをスタートして

いる。1972（昭和47）年に長慶平中学校の第７代校長として赴任、1975（昭和50）年まで務めた。長きにわたって西津軽郡内の小中学校に勤務し、1988（昭和63）年３月に岩崎村立岩崎中学校長を定年退職した。教員時代から歴史家として活躍し、『深浦町史』『岩崎村史』『鰺ヶ沢町史』『小泊村史』といった自治体史のほか、西津軽郡の教育史をまとめた大著『村から里から「子等と母校」が消えていく』（2017（平成29）年）をまとめている。

木村氏は、上北郡横浜村（現横浜町）出身で、1951（昭和26）年に川除中学校（旧川除村、現つがる市）にて教育経歴を開始した。1963（昭和38）年４月に長慶平中学校に赴任し、1966（昭和41）年３月まで勤務した。教師としてのキャリアのなかで、長慶平中学校に加えて、東鳴沢中学校（旧鳴沢村、現鰺ヶ沢町）、鰺ヶ沢町立第一中学校（鰺ヶ沢町。本校として第二松代分校を有した）といった戦後開拓地の学校での勤務経験を豊富に持っている。

山田邦照氏は、深浦町出身。1963（昭和38）年に出身校でもある深浦中学校の教諭となった。36年間の教育経歴のなかで、24年間が深浦中学校での勤務であり、校長も務めた。長慶平中学校には1978（昭和53）年４月に赴任し、1982（昭和57）年３月に転出するまでの４年間勤務した。定年退職後には、深浦町の旧秋田屋旅館を改装した「太宰の宿　ふかうら文学館」の設立に関わり、同館の初代館長を務めた。

斉藤勝義氏は、樺太（サハリン）泊居（とまりおる）出身。1949（昭和24）年に弘前市に知人を頼って引き揚げた。引き揚げの際に乗船したのは、のちに南極観測船「宗谷」に改造された船であったという。1954（昭和29）年10月に、離農した入植者の後に入る形で長慶平に移住した。翌1955（昭和30）年に小学校分校を卒業、1958（昭和33）年に長慶平中学校を卒業した。卒業後は１年間民間の林業に従事し、1959（昭和34）年からは定年退職まで営林署に勤めた。その傍ら、長慶平小中学校のPTA活動にも長く携わり、記念事業の実施などにも尽力した。

（４）倫理的配慮

本稿では、「日本教育学会の会員が取り扱う個人情報の保護等に関するガイドライン」「一般社団法人社会調査協会倫理規程」に則り、対象者に対して事前および聞き取り調査時に本研究の趣旨と内容を説明し、同意を得たことを確認して調査を実施した。併せて対象者の居住する深浦町および鰺ヶ沢町の教育委員会にも趣旨説明と協力依頼を行い、承諾と協力を得て聞き取りを行った。なお対象者の氏名については、本来であれば匿名とするのが通例であるが、すでに既刊書籍・資料等において原稿を発表されていること、また個々の教師の努力や足跡の記録、固有の被教育経験を匿名性に埋没させるよりも、ひとつの教育の記録として継承する意義をかんがみて、対象者への説明と了解を得たうえで実名での記述としている。

３．長慶平地区における小中学校の設立過程

（１）分校の設置

長慶平地区の開拓は、当初は単身入植者によって行われた。やがて1948（昭和23）年２月になると、家族をともなって入植する人びとも出てきた。単身で入植した人も、深浦町内に残してきた妻や子どもを呼び寄せ、家族で生活するようになった。

しかし移住してきた子どもたちは学校に通うこともできず、農作業の手伝いに従事していた。この状況を見かねて、入植者のうちの１人が開拓農業協同組合の事務所に子ども数人を集め、勉強を教えるようになった。1948（昭和23）年２月23日のことである。この時点では学校として認可されたわけではなく、いわば塾のような形での教育の始まりであった。しかしその後の正式な学校設立後も、この日は地区の人びとに深く銘記され、２月23日が長慶平小中学校の創立記念日となった。

およそ１か月後の３月31日に、深浦小学校長慶平分校が認可され[14]、４月６日に開校した。ただし校舎は開拓農協の事務所をそのまま利用し、配置された教員は１名[15]、机や椅子はなく、児童たちは木の切り株に座って授業を受けた。その後７月には共同食堂跡の苫小屋へ、10月には離農者の仮小屋（８坪）に移転し、ここに１教室と職員仮住宅を増築した。

1949（昭和24）年３月には第一回の卒業式を挙行し、４名の児童が卒業した。このころには入植者が増加し、在籍児童は60名近くに達し、同年９月に３教室と職員住宅からなる校舎が新築された。地区の住民や子どもたちの喜びは大きく、児童は全員で「こんな立派な学校に学ぶわれらは幸福よ。おじさん本当にありがとう」という歌を合唱した。

小学校卒業後、長慶平の子どもたちは深浦中学校に進学した。遠くて状態の悪い道路を往復４時間かけての通学である。夏場はともかく、冬になれば積もった雪をかき分けて歩き、学校に着いたときには２時間

目、３時間目の授業が始まっていた。帰りも時間が遅くなればなるほど危険になる。そうして地区では中学校の設置要望が高まっていった。1951（昭和26）年３月31日、深浦中学校長慶平分校が認可され、４月１日に開校した。こうして長慶平では小中併置による学校教育が実現した。

（２）独立認可

小中学校分校の設置が実現することによって問題となったのが校舎の狭隘化であった。さらに道路からの流水や流土にも悩まされるようになり、校舎の移転が検討されるようになった。1949（昭和24）年11月20日に発足したPTAは、年々活動が活発になり、1952（昭和27）年からは校舎移転運動が熱心に行われた。その甲斐あって同年12月に完成移転が実現し、1954（昭和29）年にも再度増築が実施され、児童生徒の増加に対応した。

学校の設備が整うようになると、PTAを中心とした地域を挙げての学校独立運動が盛んになっていった。学校がなかった時代の「たとえ分校でもどんなあばら屋でもいいから建ててほしい」という願いは、やがて「独立校として設置してほしい」という希望へとふくらみ[16]、1955（昭和30）年、長慶平小中学校の独立が認可された。「これからは、学校をセンターとして、部落の発展をはかることができる」[17]と地区の人びとの意気は大いに上がった。

この年には初めての遠足や修学旅行も実施された。その後も児童生徒の増加は続き、1956（昭和31）年にも校舎増築が行われ、さらに1970（昭和45）年12月には鉄筋コンクリート２階建ての校舎が完成した。同年10月に校章制定、11月には校旗を調製し、学校としての形がそれまで以上に整えられていった。

４．学校と地域に出会う

（１）入植者として

斉藤勝義氏は、1954（昭和29）年10月27日、家族とともに弘前市から長慶平に入植した。その３年ほど前に一度長慶平を訪れている。そのときには原生林であった土地は、入植時には開墾が進んでいた。入植と同時に深浦小学校長慶平分校に編入し、翌1955（昭和30）年３月に卒業した。分校としては最後の卒業生になる。

入植したときの長慶平の様子は次のようなものであった。

斉藤氏　当時も長慶平では現金収入の最たるものは炭焼きであった。伐採した木を炭にし、焼き畑開墾を行った。近隣の住民は農家出身者も多かったが、漁師をしていた人もいました。いずれにせよ、木を伐るというのは慣れない仕事であった。町へ売りに出すにも、窯から道路まで１㎞近くを背負って運んだ。生活は厳しく、白米などほとんど食べられないなかで、炭を一生懸命まじめに焼いた。炭焼きは昭和32年に打ち切りになるまで続いた。炭焼きがなくなると、若い人は地元の建設会社で現金収入を得、また杉の植林や枝打ち、間伐といった林業に携わる人が多くなっていった。父もそうであった。

斉藤氏は長慶平の最後の入植者であった。最初に入植した人びとはすでに何年も炭焼きを行っていた。後から炭焼きを始めた父親は、彼らと同じ条件のもとで作業をすることになり、苦労も人一倍であったという。長男であった斉藤氏には、父親を助けるという使命があった。

斉藤氏　自分も中学生になって、そのころは父親の手伝いに、炭焼きに専念してしまって、中学校ではもう学校に行ったり行かなかったりで終わってしまった。中学校のクラスは12名いました。各教科の先生が揃っていた。長慶平は独立校で、小中ずっと一緒。だからまとまりはよかったですね。

長慶平小中学校は、９年間の小中一貫教育が実現し、転入・転出も多くはなかった。そのために共に育つという雰囲気が醸成されやすく、また開拓者（あるいは開拓二世）としてのアイデンティティも明確に形成されていった。

（２）教師たちの出会い

一方、長慶平小中学校の教師たちは、赴任という形で学校と地域に接していくこととなった。長慶平はへき地である。森山嘉蔵氏は、同じ戦後開拓地の山田野地区を「開拓銀座」と呼んでいる。その理由はへき地としての環境の相違にある。

森山氏　青森県そのもの全部がへき地ですからね。長慶平が、学校でいうとへき地４級校なんです。へき地４級というのはいくつもないんです。下北郡の佐井だとか、ああいうところです。へき地として一番上が５級地なのですが、今、青森県に５級地はな

いから、長慶平は４級地です。山田野は、たしか１級地でしょう。ですから、銀座なんです。「開拓銀座」。

森山氏が長慶平中学校の校長として赴任するのは1972（昭和47）年だが、中学校分校が設置される以前、新任教員として1950（昭和25）年に深浦中学校に着任した際、担任した３年生生徒のなかに長慶平地区の生徒が含まれていた。その学級の生徒数は63名。到底教室には入りきれず、机もない。生徒たちは家から座布団を持参して座った。

担任の生徒たちのなかには、旧満州や樺太から引き揚げてきた子どももいた。また家業の手伝いのために出席もままならない生徒も少なからずいた。森山氏はそうした生徒たちの指導要録を書くのにも苦労したという。

森山氏　彼らは私を「先生」と呼んでくれなくて、「親分」と呼んでくれた。私はあまり先生づらもしたくないし、いうことは聞いてくれたんですが、なんたってみんな来てくれればいいけども、明日欠席しろよといいたくなるほど、63人来れば、指導要録を書くといったってたくさん。書くといったって書かれなくて、白い紙を見せるでしょ。どういう子どもだか学校に来ないからわからないから、書きようがないんですよ。まあ、42～43名書いたけども。だからといって、私が彼らを卒業させるかどうか、結局、私は鉛筆書きで卒業証書と卒業番号を書いて校長にのべたんですよ。「これ何だ」っていうわけで、前の人にもそう聞いていたから、「１日も学校に来ないで卒業させる学校は日本にないから、おめ、日本の教員でねな」といわれたけども、来るわけないでしょ。15歳で来なきゃ、どうして16歳で来るんです。働きに行けば賃金がよくなるし。

深浦町は漁業が盛んで、漁を手伝う子どももいる。夜に北海道までイカ釣りに出る生徒は、「先生、来いったって眠くてだめだ」と訴えた。長慶平の生徒には、当時の主要産業であった炭焼きに従事する人もいた。

森山氏　大体、炭焼きというのは木がないから営林署から払い下げてもらうでしょう。そうすると、いつまでのうちに木を伐って植林するとなるでしょう。だから、中学生になると一人前になるから、窯を作らなければいけないでしょ。窯作りにも壁を塗ったり、そして、炭を焼いて、大体あれは10日から半月で窯をあげるでしょう。背負ってくるといったって、炭は４貫なんです、16kg。中学校３年生はあれを４俵背負うんです。そして、３里の道を下がってくるんです。私がやったら、私は２俵しかだめでした。

こうした中学生たちの生活と向き合った森山氏は、文芸部の文集『永燈』を作る。そこには自身の生を見つめる彼ら彼女らの姿が投影されている[18]。

本稿の元教員の対象者のなかで最も早い時期（1963（昭和38）年４月）に長慶平中学校に赴任した木村賢治氏は、その土地の姿に目を瞠った。

木村氏　広い土地のなかに家がぽつんと１軒ある。隣近所といったって、相当に遠い。おまけに起伏も多い。そもそも地名に「平」がつくところに本当に平らなところはないのです。それはひとつの願いであり、またそこに行く人へのある種のまやかしのようなものです。最初に入植者が入ったのは２月です。山にですよ。とにかくそこに行くまでが大変で、笹藪をこいで、笹を下に敷いて、それで寝起きしたと。大変な厳しさだったと思いましたね。でも、団結が強かったんでしょうね。よく集まって話をして、満州はこうだったとか、樺太はこうだったとかって、みんなそういう話をしていました。

そして学校で生徒たちと向き合った木村氏は、冷や汗をかいたという。

木村氏　生徒のことばがきれいなんです。津軽弁で一番なまっているのが教師です。生徒たちからそれをいわれるので、話しことばにも気を遣いました。「先生たちのおかげでことばが汚くなった」と長慶平の人に笑いながらいわれたりしたものです。

樺太出身の斉藤氏によれば、そこでのことばは「標準語」であった。それゆえに「先生たちは子どもたちのことばのきれいさに汗をタラタラかいていた」という。木村氏は、当時のエピソードを振り返りつつ、「なんとしてもことばがきれいだ。心がきれいだから」[19]と記している。

森山氏は、1972（昭和47）年から３年間、長慶平中学校長を務めた。このときには当初の開拓集落として

の雰囲気からはだいぶ変化していたという。炭焼き、山菜採り、出稼ぎといった生業が完全になくなったわけではないものの、中心ではなくなっていた。そして1972（昭和47）年７月８日から９日にかけて長慶平を襲った集中豪雨を経験した。それでも当時はまだ山を下りる人はそう多くはなかった。

森山氏　昭和47年の嵐のとき、集中豪雨で、吾妻川の橋が８か所流されて、孤立してしまったんです。深浦までは大臣も代議士も来たけれども、長慶平には来てくれません。あやうく死ぬところだったけども、何とか助かりました。集落の各家庭も畑、山地その他に多大な被害が出ました。それに長慶平というのは熊の場所に人間が住んだものですから、昼でもいつでも熊は遠慮なく出ます。私たちが行っても、熊、しょっちゅう、友達ではないけどね。

家族とともに長慶平に移り住んだ森山氏であったが、子どもにとっては不便な環境であった。小遣いをもらっても、ものを買う店がない。ある日、森山氏の子どもが往復20㎞以上もの道のりを歩いて深浦の町に買いものに出たこともあった。そのときにはさすがにかわいそうだと思ったという。

1978（昭和53）年に中学校教諭として赴任した山田邦照氏は、深浦町出身で深浦中学校での勤務も長く、地域の実情には通じていた。それでも長慶平中学校への赴任にあたって、あらためてへき地校の置かれた厳しい現状を知ることになったという。と同時に、地域の人びとと出会い、決意を新たにした。

山田氏　長慶平への異動が発表になると、誰もが「はあ～」とため息をつくのです。大変なところに行くのだと。でも、別の学校へ異動することになると、去りがたい気持ちというか、強い思い出が残るのです。来たときには大変なところに来てしまったと思うのだが、帰るときにはいろいろ苦労はあったけれどいいところだったと思えるようになるのですね。それでも長慶平に行くのはとにかく大変です。道が狭く、険しいので吾妻川に落ちそうになった経験も何度もあります。地域の人たちが助けてくれました。そして学校に行くと、みんな家族みたいなのです。地域の人たちも非常に大事にしてくれた。こんなへき地によく来てくれたと。だからこそ半端な気持ちではできないぞと気を引き締めました。

本稿の聞き取りの対象者の長慶平地区および小中学校との関わりは、立場や時期をそれぞれ異にしている。異動が前提となる教員と、ここで中長期にわたって生活していく入植者とでは、学校観や地域観も異なる。そうしたなかで両者は学校という場を通じて交流を深めていった。

５．学校が生み出すまとまり

（１）学校文化と地域社会

ひとくちに戦後開拓地といっても、成立の過程はかなり多様である。とりわけ緊急開拓期に成立した開拓地の入植者は、背景や経緯も異なっており、地域社会が所与のものとして存在しないなかで生活の模索が行われた。そして戦後開拓地における地域社会が成立していく過程では、たびたび葛藤や対立が生じた。長慶平地区においても、開拓農協の分裂[20]といった状況が生じている。

長慶平への入植は、先にも見たように数次にわたって行われ、初期の深浦町・岩崎村に縁故のある引き揚げ者、その後に続く山形県出身者といった形で属性も異なっていた。

斉藤氏によれば、当初の長慶平地区はまとまりを欠いた状態であったという。

斉藤氏　そもそも津軽と山形ではことばも全然違うのです。山形県出身者の家に行けば、子どもたちも時々山形弁になりました。ここでは津軽出身者は少数派でした。しかも山形出身といっても、元から知り合いだったわけではないのです。だから最初はみんなバラバラでした。

つまり戦後開拓地においては、コミュニティは「ある」ものではなく、「あるべき」もの、「作っていく」ものであった。そして地域の外側からやってくる教師たちは、コミュニティが作られる過程を見つめることとなった。

木村氏は、長慶平の入植者たちにある種の「反骨精神」のようなものを、また山田氏は「一匹狼」的な気風を見いだしていた。そして森山氏は、それらは子どもたちにも少なからず影響していたと捉えている。

森山氏　（入植者たちは）捨てられた、棄民政策によって生まれたと、こういわれているんです。だから、そういうような子どもだから、やっぱりどんな

考え方をして生きていこうとしているのか、前からいる子ども、普通の暮らしといいますか、普通の貧乏な、深浦、鰺ヶ沢、たいていみんな貧乏ですから、普通の貧乏な人の暮らし方と、そういう開拓の人たちの考え方というのは違うのが当たり前ですよね。

だからこそ、作文教育へと目を向けた[21]。生徒たちの多様な背景に対する認識が、森山氏のひとつの教育観を生み出している。

森山氏　ですから、やっぱり作文を書いてもらうということにならないと、授業やっていけないんですよ。結局、子どもたちの考え、実態、実際、何をどう考えているか。顔は日本人で同じに並んでいても、心の底にあるものはみんな違いますよ。それを知らないで、卒業と同時に「かつてローマ帝国は」とか、そんなこと１時間、弁をふるったって、子どもたちは「あの先生、何か芝居やってるよ。おもしろいな」と。休み時間になれば、親もよかったよって、そういったもんで、綴り方をやって、国語の教員じゃないけども、綴り方というのは生徒理解、子ども理解、親の理解、そういう理解をしないことには本当の子どもと同じ部屋で教育という仕事は成り立っていかないんですよ。

山田氏は、自身が赴任した当時においても、開拓者の気風があったという。

山田氏　長慶平の子どもたちは、やる気が強い。生きる気持ちが強いのです。それは親や祖父母から引き継いだものでしょうね。「食うためには命を投げ出せ」という教えであったり、引き揚げ者の苦労といったことが伝わっていたのだと思います。

そしてバラバラだった長慶平地区は、学校を中心としてまとまりを見せていくようになった。

斉藤氏　学校が（地域にとっての）唯一のコミュニケーションの場でありました。運動会には100％足を運びました。100％というのは、在校生の家族ではないです。集落全員。それに卒業式に謝恩会、歓送迎会と、行事のたびに集まりました。（深浦の）町であれば居酒屋もスナックもあるけれども、長慶平にはない。だから、今だったら問題になるのでしょうが、学校が飲み会の中心でもあった。教員住宅に一升瓶をぶら下げていって一緒に飲んだこともあります。

学校行事はそのまま地域の行事となり、「集合的記憶」を形作る機会となった。そして教師と保護者および地域社会とのコミュニケーションの密接さは、聞き取り調査の対象者が異口同音に述べていることである。森山氏は、長慶平地区の人びとの学校との関わりを「絶対的な協力」と表現する。地域からの協力も得て、長慶平小中学校では、深浦町の他の小中学校では実施されていなかった完全給食が1956（昭和31）年から開始された。

カリキュラムも、学習指導要領に則りながらも個性的な実践が行われていた。山田氏は、長慶平小中学校在任中は、専門の国語に加え、社会と技術も担当した。そこでは次のような工夫もなされた。

山田氏　地域を活かして、例えば技術などは普通の技術の授業ではなく、山に行くわけです。そして、古い木を取ってきて、それでいろんな形に加工していく。技術と美術も一緒にしたような、そういう授業が多かったですね。そうした教育のせいか、長慶平の子どもたちは非常に命を大事にするのですよ。小さい生きものにも親がいるし、きょうだいだから、そう簡単には殺さないでねというようなことをいわれてびっくりしたのですね。

そうした教育に手応えも感じていたという。

山田氏　基礎的なものが欠けているところがあったが、やる気満々の生徒がいて、伸びてきた。それにスポーツもともなって、それが成績のほうにも表れてきた。弁論大会で県の大会で２位になった生徒がいました。その生徒が「自分はこの地域に生まれてよかった」と力強く話していました。その生徒は、少しぐれかかったところがありました。どうしてこんなところにいなければならないんだ、と。その気持ちをみんなの前でしゃべってみろ、といったら、それが評価されました。いいものを持っているんですよ。どこに行くところもないものだから、親の働いている姿を見て育つ。それは大きな強みだったのではないでしょうか。

山田氏が在任中の1978（昭和53）年９月９日、長慶

平小中学校は創立30周年を迎え、記念式典が開催された。その際、来賓の西北教育事務所長は祝辞のなかで、「長慶平の30周年は、他の学校の50周年にも100周年にも匹敵する」といった趣旨のことを述べた。それは多くの困難や環境的なハンディキャップを乗り越えてきた学校と地域に対する賛辞であった。分校時代には、町の子どもたちから「山猿」と揶揄されたり、勉強の遅れを馬鹿にされたりすることもあった。しかしこのころには、へき地教育に対する世間の見る目も変わってきた。

そして４年間の在任期間を振り返ったとき、山田氏にとっての長慶平小中学校は、教育の原点ともいうべきものを教えてもらった場であり、忘れられない学校となっている。

（２）生徒たちの進路像

全国各地の戦後開拓地では、長慶平地区と同様に入植者の子どもたちの教育を目的として、小学校（分校）の設置が進められた。しかしながら中学校まで設置された事例はあまり多くはない[22]。地域に中学校を有するということは、学校と社会とを取り結ぶルートがある、ということでもある。ではこの中学校を媒介とした社会とのつながりはどのようなものであったのだろうか。

開拓二世の斉藤氏が中学校を卒業した時期は、ちょうど高度経済成長期、集団就職の時代にあたる。

斉藤氏　私は長男なので家を継ぎましたが、同級生の大半は就職しました。「金の卵」時代であったから。昭和32、3年ごろのことです。高校に進学したのは１人だけ。12人の同級生のうち、地元に残ったのは３人だけです。私の男きょうだいも、千葉・神奈川のほうへ就職していきました。当時深浦の町のほうに就職斡旋屋みたいな人がいて、学校卒業生はその人の紹介といった形で就職していった。

1970年代の後半になると、そうした進路動向にも変化が見られるようになった。

山田氏　私がいたころには、多くが高校に進学するようになっていました。ほとんどが地元の深浦高校に進学しました。自宅から通えて、経済的な負担も小さいので。それから少し後の時代になると、町外の学校に進学するようになったと思います。彼らには、勤めなければいけない、外に出なければいけない、といった気持ちがありました。次三男はたいてい出て行きました。

上記のような傾向を読む限りでは、長慶平地区の子どもたちの進路動向は、日本全国の一般的な農村が経験したものとあまり相違がないように思われる。しかしその一方で戦後開拓地の学校ならではの進路像というものも存在した。

森山氏　教員というのはふるさとを大切にしようとか、ふるさとの何々をというけれども、彼らは私が行った（在職した）ときの中学生、小学生は、全部そこ（長慶平）で生まれた子どもたちです。しかし、ふるさと意識というのは非常に薄いんです。なぜならば、親には全然ふるさと意識がないから。お墓もないな、あったかな。だから、子どもたちは、中学校を卒業すれば、ここにいないということだけははっきりしているんです。そのために勉強するんだと。そういう意味で、それは実践していました。ただ、そうでなくて、今も私がいたときの卒業生で５～６人、山林の仕事をしていますが、山林の仕事が今、林野行政というのは非常にみすぼらしくなったでしょ。外（国産）材ばかり買っていますからね。県行造林であるとか、県の山林組合の仕事、そういうのよりないんですよ。機械も高いし。ですから、今、間伐をするといっても、機械を持って来ると、１日３万5,000円ぐらいは取られるから、頼む人がないんです。山林は投げっ放しですから。その山林の仕事に従事しているんです。それの先読みする人もあってね。大工以外に。だから、中学生にも、中学校を出てから高校へ行って、大学に出て、帰ってきてこの町をよくしようということは、薄いんです。ないんじゃなくて薄いです。

長慶平の子どもたちは、開墾に勤しむ大人たちの姿を見て育った。その労苦の経験を記憶として持っている。しかしながら、ふるさと意識というものは希薄であると森山氏は述べる。外に出て行くことは、半ば宿命づけられたもののようになっている。長慶平地区の学校は、一方においては地域のなかで求心力を持つ場であると同時に、とりわけ中学校は、地域を出るという宿命を支えるものとなっていた。だからこそ、より「ふるさと」というキーワードが学校という場において強調されたのではないか。

（３）記憶の継承

教師や学校の側からの「ふるさとを大切にしよう」というメッセージや、西津軽地方において戦前期から培われた生活綴り方の教育実践とは対照をなすように、長慶平の人びとにおけるふるさと意識は希薄であったのではないか、という指摘は上に見たとおりである。その一方で、長慶平地区では現時点で確認できる限りにおいて４冊の記念誌が刊行されている。入植30周年を記念して編まれた『長慶平開拓史』『ふるさと長慶平』（いずれも1977年）、同じく50周年を記念した『長慶平開拓50周年及び長慶平小中学校創立50周年記念誌　長慶平』（1997年）、長慶平小中学校の閉校を記念した『長慶平　2002』である。

斉藤氏は、これらの記念誌の作成に関わり、『長慶平　2002』では編集委員長を務め、教師たちとともに編さんに取り組んだ。そこには「記憶があるうちに活字にしなければ」という思いがあったという。

斉藤氏　ただ語り継ぐだけでは、記憶がだんだん薄れてしまうので、文字に起こそうじゃないか、という話のなかから、では書いた文章をもとに開拓記念誌を作らなければ、学校の閉校記念誌も発刊しようということになったのです。そうして先生たちと一緒に作っていきました。

「記憶があるうちに活字にしなければ」という思いの背景には、戦後開拓地ならではの、「ふるさと」というものの存在の不確かさやゆらぎがあったのではないか。それは記念誌と同時期に建立された記念碑[23]にも表れている。確固たる歴史というものがないからこそ、記憶を形にする必要がある。そして、この記憶のなかの重要な位置を占めたのが学校であり、また記憶を記録する役割を担ったのもまた学校であった。こうして形として残されていく記憶が、「ふるさと」なるものを偲ぶうえでのよすがとなっていたのではないか。

小括

本稿では、長慶平地区というひとつの事例に即して、戦後開拓地にとっての学校の存在意義を検討してきた。先にも述べたように、戦後開拓地というカテゴリーで括られる地域社会は多様性を持っており、安易な一般化は避けなければならない。また、対象者の世代から、本稿が聞き取り調査を通じて把握し得たのは、1950年代半ば以降の時期の学校と地域社会をめぐる教育・被教育経験であり、緊急開拓事業期における開拓地の成立過程を直接的に捉えられていないという制約がある。そうした限界をふまえつつ、長慶平地区における学校と地域社会の関係を捉えていくと、次のような特徴が見えてくる。

第一に、形成されつつあった開拓地に入っていく際、当初「よそ者」であった新規入植者（の子ども）や教員にとって、そこはそれまで生きてきた社会とは異なるものとして経験されたということである。西津軽地方にありながら、その地方で生きてきた人にとっても長慶平は特殊な場であった。しかしながら、そこでの経験は、教師たちの回想に多く見られるように、「原点」といったことばでもって表現される。そして入植者、とりわけ第二世代である子どもたちにとっては、似た境遇にある同輩と９年間を共に過ごす学校という場が、アイデンティティを形成するうえで重要な役割を果たしたと考えられる。

第二に、環境的に「外」と隔絶した戦後開拓地においては、学校の行事やそこでのコミュニケーションが地域のまとまりの基盤となっていった。そして長慶平地区においては、「絶対的な協力」とまで表現されるような学校と地域社会との強固な関わりがあった。それは学校行事が地域社会を基盤として成立していたという側面と、地域社会が学校行事を基盤として成り立っていたという相互作用の所産であり、とりわけ長慶平地区のような戦後開拓地においては、後者の側面がより大きかった（ないしは先んじた）といえるだろう。

第三に、戦後開拓地における学校は、その「外」へとつながる、子どもたちを送り出すルートとしての役割を担っていた。子どもたちは、学校を媒介として形成される「ふるさと」を認識しつつも、そこから出て行くという宿命を受け止めていた。それは学びの動機づけにもなっていた。ここにひとつのアンビバレンスがある。

第四に、上の点とも関連して、戦後開拓地では記憶の継承が早い時期から意識され、実践されたということが挙げられる。これは長慶平地区において顕著に見られる特徴であるが、開拓地のアイデンティティを形として残すということがかなり明確に意識されていた。そしてそうした実践を可能にしたのが、地域における学校の存在であった。「歴史」の浅い地域であるがゆえに、学校をひとつの軸として「記憶」の継承に熱意が傾けられた。

長慶平小中学校は、1950年代半ばから60年代にかけては100名近い児童・生徒が在籍したものの、1970年代には半減し、創立50周年を迎えた1997（平成９）年には11名にまで減少、そして2002（平成14）年３月31日をもって閉校となった。最終年度の在籍者は小学校１名、中学校３名であった。現在、長慶平地区は学齢児童生徒のいない地域となっている。それでも現住戸数は20戸近くあり、現在も絆は強いという。かつては分裂をも経験した上長慶平開拓農業協同組合は、開拓行政が終了（1975（昭和50）年）してから久しい今日でも、「開拓」の２文字を残したまま存続している。

本稿での検討から、次のような課題が導かれる。ひとつは、この長慶平地区での教育経験および被教育経験というものを、西津軽地方で蓄積された生活綴り方や郷土教育といった教育文化と関連づけることである。もうひとつは、長慶平小中学校における教育課題を、より広い文脈のなかで捉え返すことである。それは、戦後開拓地の学校というカテゴリーを設定する際に引かれた、境界線の意味を問うという作業でもある。

謝辞

本稿をまとめるにあたり、聞き取り調査にご協力いただいた森山嘉蔵氏、木村賢治氏、山田邦照氏、斉藤勝義氏には深く感謝申し上げます。また、聞き取り調査の実施や文献資料調査に際しては、深浦町教育委員会の伊東信氏、同町歴史民俗資料館の佐藤洋一氏および鰺ヶ沢町教育委員会の中田書矢氏にもご尽力いただきました。ここに厚くお礼申し上げます。

附記

本稿は、日本学術振興会科学研究費補助金（基盤研究（C）（一般）課題番号20K02504）による研究成果の一部である。

註

[1] 一例として、馬場四郎「コミュニティ・スクール理論の適用の可否に関する一検討―岐阜県山村の一事例について―」『教育社会学研究』第１集、1951年、同「教育環境としてのへき地―山村―」、籠山京「教育環境としてのへき地―開拓地―」海後宗臣・牧野巽・細谷俊夫編集代表『講座教育社会学Ⅸ　へき地の教育』東洋館出版社、1956年所収などが挙げられる。

[2] 北村達「開拓地の社会構造―釧路国白糠町和天別戦後開拓地―」『僻地教育研究』第６号、1957年、門間薫吉「戦後開拓部落の実態（上）―戦後開拓農家はどのように階層分解したか―」同第７号、1957年、北村達「戦後開拓僻地の社会構造―美瑛町五稜地区内部落の事例研究―」同第11号、1959年、佐藤守「開拓村における学校の基本的性格―北海道白老町森野の事例―」『秋田大学学芸学部研究紀要　教育科学』第17号、1967年などがある。

[3] 髙瀬雅弘「戦後開拓地における学校と地域社会 (1)―1970年代の小学校分校における教育実践と地域社会の相互作用に関する事例研究―」『弘前大学教育学部紀要』第120号、2018年、同「戦後開拓地における学校と地域社会 (2)―教師たちから見た1950年代の新制中学校と開拓地―」『弘前大学教育学部紀要』第122号、2019年。

[4] 大門正克『増補版　民衆の教育経験―戦前・戦中の子どもたち―』岩波現代文庫、2019年。

[5] 沢山美果子「解説」同上書所収、PP.389～390。

[6] 木村元編『境界線の学校史―戦後日本の学校化社会の周縁と周辺―』東京大学出版会、2020年。

[7] 同上書、P.4。

[8] 髙瀬、前掲論文を参照。

[9] 長慶平開拓史編集委員会編『長慶平開拓史』長慶平開拓30周年記念事業協賛会、1977年、P.30。

[10] この電化開拓は、1955（昭和30）年に自家発電所の完成によって実現する。しかしその性能は十分ではなく、1960（昭和35）年には使用不能になった。この建設費の負債がのちのちまで地域を苦しめることになった。青森県農林部農地調整課『青森県戦後開拓史』、青森県、1976年、PP.381～382。

[11] 「長慶平電化開拓村事業計画構想」には、神社に加えて「基督教会堂」の建設計画が記載されている。

[12] 前掲『青森県戦後開拓史』、P.382。

[13] 同上書、P.381。

[14] ただし『長慶平開拓史』の記述や、森山嘉蔵氏の証言によれば、当初深浦町教育委員会の反応は芳しいものではなく、認可を得るのは相当に困難であったという。

[15] 最初の教員となったのは、入植者のリーダーが、知人に入植者の資格を持たせ、福岡県から呼びよせた人であり、分校として認可が下りた後も引き続き教員として子どもの教育にあたった（前掲『青森県戦後開拓史』、P.380）。

[16] 前掲『長慶平開拓史』、P.63。

[17] 同上。

[18] こうした作文教育は、戦前からの生活綴り方との関わりにおいて注目すべき実践である。詳細な検討については別稿を期したい。

[19] 木村賢治「ありがとうございました」長慶平開拓50周年及び長慶平小中学校創立50周年記念事業実行委員会編『長慶平開拓50周年及び長慶平小中学校創立50周年記念誌　長慶平』、1997年、P.40。

[20] 長慶平地区では、1948（昭和23）年と1956（昭和31）年に、開拓農業協同組合の分裂を経験している。のち1962（昭和37）年に分裂していた農協は再び合併した。

[21] 長慶平小中学校の学校文集『山びこ』は、森山氏が赴任する前年の1971（昭和46）年より刊行され、在任中にも

毎年刊行された。

[22] 津軽地方の戦後開拓地に開設された中学校としては、黒石市の厚目内小中学校（1947（昭和22）年分校設置、1955（昭和30）年独立、2008（平成20）年閉校）がある。

[23] 現在、長慶平小学校跡地には「創立五十周年記念」の碑が、また学校を見守るように「長慶平開拓五十周年記念碑」がそれぞれ建っている（いずれも1997（平成９）年建立）。

（2021. １.20 受理）